

活での具体的な不満の解決法を本人に指導するとともに、家族に対しては叱責より賞賛によって望ましい行動を定着させてゆくように助言を行っている。将来的には社会生活訓練なども必要であると思われる。

本例は2例とも難治性の神経症様症状を呈していたが、学習障害の二次的情緒障害に基づく症状であった。学習障害者には通常の神経症患者に用いられるような洞察的な精神療法は無効なことが多く、認知発達のアンパランスに合わせて家庭、学校、職場などの環境を調整したり、生活の枠付けや社会生活訓練などが必要である。したがって小児期のみならず、思春期や青年期、成人に達した症例についても、学習障害という視点から診断や治療方針の検討を要する症例があることを指摘した。

4) 身体接触を求める分裂病患者について

田村 絹代	(五日町病院)
伊藤 陽・茂野 良一	(新潟大学精神科)
田辺 洋之	(長岡赤十字病院 精神科)
三浦まゆみ	(新潟大学保健 管理センター)
稲月 原	(小出本田病院)
角田 典穂	(長岡保養園)
丸山 公男・佐久間友則	(新潟信愛病院)
田辺 瑞穂	(国立療養所犀潟 病院)
関 美好	(松浜病院)
小熊 隆夫	(松浜病院)

第2報では、母親に対する身体接触行動が認められた32例の分裂病患者の臨床特徴について報告した。今回はそのような行動が認められた症例(以下「(+群)」)と認められない症例(以下「(-群)」)とを比較検討した。

【方法】外来通院中の患者で、従来診断による「分裂病」の診断が確定している患者を対象とし、'93年4月1日～'94年3月31日にアンケート調査を実施した。“身体接触”の定義は、触る、撫でる、軽くたたく、抱きつく、一緒の布団に入る等で、性行動や暴力は除外した。対象患者のうち、調査を見合わせた者、診断未確定例、合併症のある者計33名を除外した残り190名について調査した(男性96名、女性94名)。

【結果】①(+群)は32名、(-群)は158名で、外来分裂病患者の約15%に身体接触行動を認めた。②調査時の平均年齢は(+群)26.7才、(-群)36.0才、平均発症年齢は(+群)19.2才、(-群)24.2才で、共に(+群)が(-群)より低い、③(+群)では女性患者が多い。④従来診断:(+群)では破瓜型が56.3%、

妄想型は0%。(+)群では、破瓜型25.9%、妄想型35.4%、分類困難型31%。⑤DSM-III-R分類:治療開始時点:(+)群では分類不能型が65.6%と圧倒的に多く、妄想型は0%。(+)群では分類不能型が49.4%、ついで妄想型が31%。⑥調査時点:両群共に残遺型が最も多い(各40.6%、50%)。寛解期にある患者が両群共に約15%の率で存在した。⑦接触行動の発現時期:初期陽性症状が消退した後の疲弊抑鬱期。⑧両群を通じて、母親に対してはPositiveに評価する患者が多い(各68.7%、48.7%)。父親に対しては、(-)群ではNegativeにとられる患者が46.8%だが、(+群)では離別や無回答、また父親が来院しない症例が多く、父親との関係の希薄さがうかがえた。

【考察】我々が、分裂病患者の中に、主に母親に対して身体接触を求めていく患者がいることに注目したのは、そうした患者の臨床特徴をとらえ、その行動の意味を解することで、予後の予測や治療に役立てられないか、という仮説を立てたからである。

今回の調査では、身体接触行動を示したことのある患者は、外来分裂病患者の約15%を占め、破瓜型近縁の若年発症の患者に多いという結果が得られた。病型の比較では、治療開始時には(+群)では破瓜型もしくは分類不能型が多く、(-)群では妄想型がかなりの部分を占めるという病型分布の差が認められたのに対し、調査時には、両群共に残遺型が最も多く、(+群)40%、(-)群50%と、近似した値であった。寛解状態にある者の率も約15%でほぼ同率であった。すなわち、(+群)も(-)群もその予後に著しい差異はないという結果が得られた。

今後はさらに、Matching Methodを用いた比較や、(+群)の個々の症例の経過をprospectiveに観察することが必要であろう。

5) 抗精神病薬服用患者における高脂血症、肥満、糖尿病の発生とインスリンとの関係について

角田 雅彦・山口 勇司
大橋 正和・田宮 崇(田宮病院)

今回われわれは、抗精神病薬服用患者における高脂血症、肥満、糖尿病の発生メカニズムについて検討した。対象はT病院に入院中のDSM-III-Rの診断基準で精神分裂病と診断された27例(男18例、女9例、男性の4例は糖尿病で経口糖尿病薬を服用している)で、平均年

齡42.3±7.2歳，平均服薬期間16.7±5.4年，平均服薬量(CP換算)988.9±724.7mgで，患者本人の同意を得られた者のみを対象とした．急性期は病状が安定しておらず，服薬内容もかわるので，服薬内容が一定して，病状が安定した慢性分裂病患者を対象とした．採血は早朝空腹時に行い，インスリン，プロラクチン，総コレステロール(TC)，トリグリセリド(TG)を毎月3カ月間測定した．検査データは3回の平均値をとった．肥満度は，平田法で標準体重を算出し，標準体重より何%重いかで示した．

結果は，インスリンとTGとの関係を調べたところ1%水準で有意な相関がみられた($r=0.741$, $p<0.01$)．インスリンは直接肝臓に働きかけTGの合成，分泌を促進させることが知られている．次に，女性患者においてインスリンと肥満度との関係を調べたところ，5%水準で有意な相関がみられた($r_s=0.708$, $p<0.05$)．インスリンは脂肪細胞に作用し，血中のTGの取り込みと細胞内蓄積を促進し脂肪量を増加させる．男性患者でもインスリンと肥満度との間に5%水準で有意な相関がみられた($r_s=0.554$, $p<0.05$)が，ある程度の肥満になるとそれ以上はインスリン値が増えても肥満度は増加せず糖尿病になる傾向がみられた．一般に，男性肥満，上半身肥満，内臓脂肪型肥満および女性肥満，下半身肥満，皮下脂肪型肥満はそれぞれ同義的に称されており，前者が後者に比べて合併症を有する頻度が高いと言われている．以前，われわれは，糖尿病の罹患率は女性よりも男性患者で高いことを報告しているが，これは男性患者は女性患者に比べて，内臓蓄積型肥満が多いためと考えられた．さらに，プロラクチンとインスリンとの関係を調べたところ有意な傾向が認められた($r=0.339$, $p<0.1$)．プロラクチンの分泌はドーパミンニューロンの影響を直接受けることが知られており，抗精神病薬服用患者では，抗精神病薬が摂食中枢に直接作用しインスリンの分泌が促進されたと考えられた．

これらのことから，抗精神病薬服用患者では，抗精神病薬が摂食中枢に直接作用しインスリンを上昇させ，インスリンは肝臓に働きTG値を上昇させ高TG血症を発生させ，インスリンはまた肥満細胞に働いてTGの取り込みと細胞蓄積を促進して肥満を発生させるが，男性でよくみられる内臓蓄積型肥満では糖尿病を発生しやすいのではないかと考えられた．

6) ^{123}I -IMP SPECT で脳血流低下を認めた非24時間睡眠覚醒リズム症候群の1例

高橋 誠・横山 知行
飯田 眞 (新潟大学精神科)
小田野行男・高橋 直也 (新潟大学放射線科)

【はじめに】非24時間睡眠覚醒リズム症候群は，正常な24時間周期の環境下において睡眠覚醒等の概日リズムが25時間前後の自由継続状態(フリーランニング・リズム)を呈するものであり，その治療には高照度光療法やビタミンB₁₂投与が有効とされている．本疾患の生物学的要因としては，生体リズムの同調障害が推定されているが，画像診断の上からこの疾患をとりあげた報告はみあたらない．今回我々は，高照度光療法で改善した非24時間睡眠覚醒リズム障害の患者に対して，この療法の前後に ^{123}I -IMP SPECTを施行したので，ここにその結果を報告する．

【症例】15歳女性．中1の頃より次第に睡眠時間が不規則となり，深夜までテレビやラジオに熱中する宵っ張りの生活が始まった．その後腹痛，便秘，不登校が出現し1993年1月21日，S病院リエゾン精神科を受診．生活リズムの矯正を目的とした入院治療や triazolam, mecobalamin 等の薬物治療が試みられたが改善はみられなかった．1994年4月，B高校に入学．その後の睡眠記録より，平均約24.9時間の非24時間睡眠覚醒周期がみられたため，高照度光療法を行う目的で7月27日，N大学医学部付属病院に入院した．

入院後開始した高照度光療法の結果，午後11時～午前0時に入眠し午前5時～6時に覚醒するというほぼ規則的な生活リズムが出現し，睡眠覚醒リズムは正常化したと判断されたため，9月30日退院した．

【SPECT 所見】本症例の脳血流分布を評価する目的で高照度光療法の前後に ^{123}I -IMP SPECTを行った．SPECTの実施にあたり，本人と家族には研究目的の検査であることを説明し，書面で同意を得た．

光療法開始前のSPECTでは両側小脳，脳幹部，両側後頭葉皮質の脳底動脈支配領域に低血流がみられたが，光療法により睡眠覚醒リズム改善後のSPECTではこれらの領域の血流は改善していた．

【考察】本症例は14歳時に顕在化した非24時間睡眠覚醒リズム症候群であり，高照度光療法の施行より睡眠覚醒リズムの正常化が得られた．治療開始前に行われたSPECTで，両側小脳，脳幹部，両側後頭葉皮質を中心とした脳底動脈の灌流領域に血流低下を認め，睡眠覚醒リズムの改善後これらの領域の血流低下は改善したこと